

10月14日政変から40年：タイ政治の現地点

玉 田 芳 史

10月14日政変から40年：タイ政治の現地点

玉田 芳史

1	はじめに	240
2	10月14日政変とタイ政治民主化	241
3	セークサンの転向	244
4	2006年クーデタと賛否両論	250
5	自己陶醉	254

1 はじめに

タイでは政治の混乱が続いている。2006年9月の軍事クーデタが大きなきっかけであった。タイではクーデタは珍しいことではない。エリート間の権力闘争の一コマであり、支配者が交代するにすぎない。国民が反発することはなく、失脚したものが復活することもない。これが従来のパターンであった。しかし、2006年クーデタは従来のパターンとは異なった。

与党（タイラックタイ党）解党、与党幹部110名の休職（政治職就任5年間禁止）、党首（=前首相）の資産凍結、新憲法起草といった措置を講じた後、2007年12月に総選挙が実施されると、クーデタで打倒された勢力（タックシン派）が勝利をおさめた。そこで、クーデタの水先案内役を務めていた黄シャツをまとうデモ隊（民主主義のための国民連合、PAD）が、2008年には首相府や国際空港などを占拠して圧力をかける中、憲法裁判所が政権を崩壊に追い込んだ。すなわち、9月には料理番組に出演して報酬を受け取った首相に利益相反を理由として失職判決を下し、さらに12月には2007年総選挙での運動員饗応を理由に与党に解党判決を下した。間髪を入れずに陸軍首脳が与党議員に圧力をかけて、野党民主党への政権交代を実現した。

総選挙の結果を無視する政権交代に憤る人びとは赤シャツをまとい（反独裁民主戦線、UDD）、2009年と2010年に総選挙の実施を求めてデモを行った。下院議員の任期満了を迎える2011年に、民主党政権は選挙制度を改革して選挙に臨んだ。しかし、その総選挙ではタックシン派がまたしても勝利をおさめた。2011年は深刻な洪水被害に見舞われたせいもあって、激しい与野党対立は生じなかった。2012年には反タックシン派が装いを改めてデモ集会を開き、軍隊の力を借りて政権を倒そうと企んだ。しかし、デモ参加者が少数にとどまり、軍隊が静観した結果、不発に終わった⁽¹⁾。2013年には政権側が上院を民選化する憲法改正案と政治犯への包括的な恩赦法案を準備したため、反対運動が盛り上がった。11月以後野党民主党が前面に出てデモを行い、2法案を廃案に追い込むと、目標を変更して政権の退陣を要求した。政権が12月に国会を解散しても、反タックシン派は首相辞任要求デモを止めず、民主党も選挙をボイコットした。

反タックシン派は選挙では勝算が乏しいため、選挙以外の方法で政権打倒を企ててきた。2006年と2008年にはそれに成功し、2013年もその再現を狙った。他方、タックシン派の政党は2001年以後、05年、06年、07年、11年とすべての総選挙で勝利をおさめてきた。選挙で勝敗を決めるといふ民主政治に一本化できず、選挙の尊重派と軽視派という異種格闘技のような状況が続いているのが混乱の主因である。混乱に拍車をかけるのはデモの応酬である。

そのデモに関して奇妙なのは、2009年と2010年を除くと、政権側がデモ隊の取締をほとんど行ってこなかったことである。これは取締が政権崩壊に繋がる可能性が高いと懸念するからであった。首相府や官庁を占拠するデモ隊の強制排除に乗り出すと、なぜ政権が倒れるのか。その理由の一端は1973年10月14日の政変にあった。40年も前の事件がなぜ、どのようにして、今日の政治状況に影響を及ぼすのか。本稿では、10月14日政変をてがかりとして、近年のタイ政治混乱を眺める視角を提示してみたい。

2 10月14日政変とタイ政治民主化

2-1 10月14日政変とは

1973年10月14日に1958年から続く軍事政権が倒れる政変が勃発した。前任者の死去を受けて1963年に政権を引き継いでいた軍人タノームは、68年に憲法を制定し、69年に総選挙を実施したものの、71年には自らの政権にクーデタを起こし軍事政権に逆戻りした。権力の濫用や私物化への不満が高まる中、72年に全国学生センター（NSCT）の書記長になったティーラユット・ブンミーが日本製品不買運動などに成功して、学生運動が活発になっていった。73年10月6日に憲法の公布施行を要求するビラをバンコク市内の繁華街で配布した者たち13名が逮捕されると、釈放と憲法制定を要求する人びとがタムマサート大学に集まった。13日の土曜日は、NSCT代表が政府側と交渉する中、正午にはセークサン・プラストクンが率いるデモ隊が大学から民主記念塔への移動を始めた。国王は同日午後4時半にチトラダー宮殿でNSCT書記長ソムバット・タムロンタンヤウォンらの学生代表と謁見し、政府が要求に応じたことを伝えた。13名の無条件釈放と1年以内の憲法制定が合意内容であった。これで事態は静まるはずであった。

しかし、民主記念塔周辺に集まる学生にはその情報が伝わらなかったため、夕方にはチトラダー宮殿近くの5世王騎馬像広場への移動を始めた。集会の即時解散を望むソムバットらと、憲法制定まで1年を要することに不満なセークサンらの間には意見の食い違いがあった。14日午前3時にNSCT前書記長のティーラユットが仲裁して、デモ集会の解散を決めた⁽²⁾。円滑な散会を助けるために宮殿正門前で学生に向けて国王陛下の言葉を代読した王宮警察のワシットの回想によれば、「集会参加者たちは歓喜し、宮殿に向かって国王賛歌を合唱した後、帰途についた。」ところが、デモ参加者が帰ろうとしたところ、警察に阻止されて負傷者が出た。「国王はそこで宮殿の正門を開き集会参加者が宮殿敷地内に逃げ込むことを許した⁽³⁾。」この流血の情報が流布すると、バンコク市内の各地で衝突

が起き多数の死傷者が出た⁽⁴⁾。14日の19時に国王はテレビに登場し、速やかに正常化するよう求めた。15日の宵の口になって、首相が外国へ出国したことが発表されて、ようやく事態が沈静化した。

この政変は、まず学生がデモを行い、それに国王が同調し、さらに軍主流派が軍事政権を見捨てたという3つの要素から成り立っていた。多くの国民の脳裏には、①学生による民主化運動、②国民を銃弾から守り首相に退陣を求めた民主的な国王という2つのイメージが鮮明に焼き付けられている。

2-2 10月14日政変の遺産

2013年のタイは1973年の10月14日政変から数えて40年目であった。前年の2012年は1912年反乱から100周年、1932年立憲革命から80周年であった。いずれもタイ政治の民主化にとって重要な事件である。しかし両者には大きな違いがある。民主化にとっての敵は、10月14日政変時では軍事政権であったのに対して、後者では絶対王制であった。君主制も軍隊とともに、政治への関与を今日でも続けているため、節目となる事件をどう解釈するかによって、その正当性に違いが生まれる。たとえば、憲法と国会をもたらし1932年の革命は、人民党が勝ち取ったものなのか、当時の国王7世王が下賜したものなのか。君主制は民主主義の先導者だったのか、それとも妨害者だったのか。解釈が権威や権力に影響を与えるがゆえに、君主制は、人民党への評価を下げ、君主制の名誉を回復することに努めてきた。1960年代末に国会議事堂新築構想とともに7世王の銅像を建立する案が登場し、紆余曲折の末1970年代末に国会議事堂正面に建立する勅許を得て、1980年12月10日に落成式が執り行われた⁽⁵⁾のはその一環である。これは議会政治の創始者、つまり「民主政治の父」が7世王であることを示す意味が込められていた。

この点で、1932年革命よりもさらに重要なのが10月14日政変である。この政変は今日まで続く政治体制の起点と見なしうる。ただし、その体制が、選挙で為政者が選ばれる代議制民主主義なのか、あるいは君主制が政治への発言力を保持する限定的な代議制民主主義なのかは意見が分かれるところである。その政変の前には、憲法も国会もない軍事政権であったため、代議制民主主義にとって大きな前進となったことは間違いない。大学生が軍事政権を崩壊に追い込んだという意味で民衆革命的な面があり、タイ政治の民主化にとって金字塔のような偉業として記憶されている。しかしながら同時に、この政変までは軍事政権への協力者とどまっていた君主は、政変への関与を通じて、軍隊や警察の銃弾から国民を守り、民主主義を促進する君主ということで政治的な権威を飛躍的に強化した。政変直後には1946年の即位以後初めて意中の人物（サンヤー・タムマサック）を首相に選び、その後10年ほどをかけて軍隊を君主制の忠犬に変えることに成功をおさめた。1978年憲法

に初めて明記され、2006年以後護持に一段と力が込められるようになった「国王を元首とする民主主義体制」は10月14日政変が棟上げ式となっていた⁽⁶⁾。この政変は民主化にとっても王権強化にとっても重要な事件であった。気鋭の政治学者プラチャックは、10月14日政変が「政治運動のモデルであり、理想や言説の典拠となっており、個人と社会全体の双方にとっての記憶や経験の場」であると指摘する。彼によれば、たとえば2006年以後折に触れてわき起こる首相を国王に下賜してもらおうという議論は、この政変が根拠の先例となっている。路上集会を開くデモ隊を手荒に鎮圧すれば、政権は退陣を余儀なくされるというのもこの政変の経験に基づいていた⁽⁷⁾。

2-3 政治と十月人の二分

10月14日政変直後には学生、農民、労働者などの運動が活発になった。しかし近隣のインドシナ地域で共産主義者が勢力を拡大するにつれて、タイ国内では反共勢力が伸張し、1976年10月6日のタムマサート大学での虐殺を口火とした軍事クーデタで左派勢力や進歩派勢力は厳しく抑え込まれるようになった。このため、3000名以上の学生が弾圧を逃れてタイ共産党の武装闘争に参加した⁽⁸⁾。カンボジア内戦と関連した中国共産党からタイ共産党への支援の停止、それと符合したタイ政府の赦免政策のゆえに、ゲリラが1970年代末以後の数年間に市民生活に復帰して、タイ共産党は1980年代初頭に崩壊した。1970年代に学生運動に参加した人びとは、1985年のプラザ合意以後の外国からの投資ラッシュのおかげもあって、1980年代半ば以後実業家、ジャーナリスト、芸能人、NGO、学者、政党政治家など多様な分野で活躍するようになっていった⁽⁹⁾。

1992年5月に政変が起きると、都市中間層による民主化運動という解釈が定着した⁽¹⁰⁾。その中間層の中でも特に発言力が大きいのは、年齢が40歳代を迎えて各分野の第一線で活躍するようになっていた1970年代の学生活動家であった。1973年10月から1976年10月にかけての3年間を中心とする時期に学生運動に参加した人びとは「十月人 (khon dual tula)」と呼ばれる⁽¹¹⁾。そこには、当時の急進派も穏健派も、学生団体幹部も一般学生も、ゲリラ闘争への参加者も非参加者も、現在の進歩派も保守派も幅広く含まれる。1970年代にすでに多様であった人びとは、その後さらに多様化している。しかし、彼らにはその時代に学生運動に参加したという共通点がある。イデオロギーの違いを超えて、ほとんどの人びとから民主化運動であったと評価されている10月14日政変に関与したことが彼らの勲章であり、彼らの発言、行動、作品などに民主的な正当性を付与している。このため、十月人のまとまりが低下するのと反比例して、10月14日政変の精神や狙いの正当な継承者であるという本家争いも生じうる。

10年前の30周年には、10月14日政変が民主主義勢力の栄えある勝利だったというコンセ

ンサスがあった。しかし、2006年9月19日クーデタとその後の政治対立で、そのコンセンサスは失われた。国民が黄シャツと赤シャツに分かれていがみ合う中、十月人は双方の陣営に分属して指導的な役割を担うようになったからである。毎年10月14日に政変を記念する行事を主催してきた「10月14日財団」は、公衆衛生省で局長などを歴任した大物医師が会長、官選上院議員が事務局長を務めるようになって黄シャツ色を強め、赤シャツ側の十月人との間に溝が生まれていた。2013年には赤シャツ幹部が「完全な民主主義のための10月14日委員会」を結成して独自の式典を行った。委員会は10月13日に中心行事を行ったほか、10月5、6の両日には気鋭の研究者を招いてタムマサート大学で「10月14日政変以後」と題するセミナーを開催し、政変への関心を喚起した⁽¹²⁾。委員会が10月13日に、財団が10月14日に実施した講演会は、前代未聞の競演となり話題をさらった。10月14日政変当時学生運動の代表的な指導者であった2人の学者を講師に招いたからである。ティーラユットとセークサンである。セークサンは両日とも登壇し、ティーラユットは14日に講演を行った。両名とも、10月14日政変をどう捉えるのか、その後のタイの民主主義をどう眺めるのかについて語った。

ティーラユットの講演は、学術的には興味をひく点がないものの、奇をてらった内容ゆえに話題性はあった。結果的には、彼はセークサンの引き立て役になったといっても過言ではなかろう。両者とも2006年以後の政治対立の中ではどちらかといえば黄シャツ側に加担してきた。政局に関する発言が多いティーラユットの場合にはそれがより鮮明であった。しかしながら、セークサンは2つの講演で、赤シャツの側に歩み寄った。大げさにいえば転向である。このため、黄シャツ陣営からは辛辣な非難を招くことになる。セークサンが10月14日政変以後の政治をどのように捉えてみせたのか、黄シャツ寄りから赤シャツ寄りへ転じたのは何故なのか。黄シャツはどのような理由でそれを批判したのか。セークサンの講演とそれへの批判から、タイ政治の民主化と混乱を振り返りたい。そしてさらに、2013年11月以後に選挙を拒否するためにデモを行った勢力の思考回路を垣間見てみたい。そこには黄シャツに特徴的な考え方が示されているであろう。

3 セークサンの転向

3-1 ティーラユットの講演

ティーラユットは1950年1月10日生まれであり、チューラーロンコーン大学工学部在学中にNSCT書記長として学生運動の活性化に重要な役割を果たした。彼は2013年10月14日午前中に「10月14日40年：10月14日政変以後40年の民主主義の理想」と題する講演を行った⁽¹³⁾。

その概要は次の通りであった。

「10月14日政変から40年がたったというのに民主主義があまり進んでいないのはなぜなのかという質問をよく受ける」と切り出したティーラユットは、「質問者は民主主義が何なのか、政治や歴史を理解していない」と答えた。第1に、「民主主義には実現の必然性がない。」第2に、「民主主義は法律に定めれば実現するわけではない。1932年立憲革命や10月14日政変で、天空から持ってきて地上に据えれば、タイに民主主義が誕生するというわけではない。」民主主義は学習や闘争の産物である。

「10月14日政変は代議政治と選挙という新しい空間を政党に開いた。政党はそれまで政治から排除されてきた地方の資本家や影響力者から生まれた。政治権力は農村部に出自があり、国家や官僚制に依拠して利益を追求することに目標があった。民主主義の精神は皆無である。」ティーラユットは続けて、「タイの政党は旧資本、軍隊、官僚制に一貫して依存しており、[1997年の] 経済危機以後には旧資本とその他の制度が力を失った。新資本の代表であるタックシンが、権益の政治的な基盤を、国家への寄生から、国家や農村部への直接的な支配へと格上げした。その結果、かつて国家権力を握っていた保守派と、政党を通じて政治権力から利益を得ようとする新資本との間に激しい対立が発生し、その危機が今日まで続いている」と述べた。

この説明には飛躍がある。一方では、政党政治家が地方代表であり、利益追求に余念がないと批判する。他方で、1997年以後は資本家の勢力地図が書き換えられて、タックシンに代表されるように、政治権力を利用して利益を追求しようとするものが政党で主導権を握るようになったと批判する。政治家を束ねる政党を支配するのが一貫して首都の資本家であったことの説明を省いているため、地方選出の国会議員と新興資本家の私利私欲追求の悪辣ぶりを強調する説明になっている。これは、次に続くタックシン批判につながっている。

「タイ人は物事を何かの悪癖を持った人間(khi、糞の意味もある)という観点から眺めることを好む。」「タックシンはタイ政治にとって『肛門に詰まった糞野郎』である。いきんでも出ないのである。」インラック首相は「おめかし屋」や「愚図」である。タイの保守的な支配階層[=軍隊]は「中途半端野郎」である。口先では立派なことを言っても、しつぺ返しを恐れて行動に移さない。

「クーデタはもう生じないかもしれない。反対するものが多く、支持者がいないからである。武力を使ってクーデタを実行しても、保守派勢力には国家を導ける人物や的確な構想がない。特定の個人や集団、とりわけ旧来の支配階層が、国家を導いていけるとは考えられない。」

ティーラユットは最後に赤シャツと黄シャツに言及した。「赤シャツ運動が庶民や草の

根の人びとの本当の代表であるならば、赤シャツの幹部が与党プアタイ党に草の根への分権を進めるように提案しないのはなぜなのか。また、ポピュリズム政策の功罪を・・・なぜ論じないのか。他方、保守派勢力の代表のように思われる黄シャツは、保守派勢力に本当の地方分権を認め、視野を拡大し、自己改革に乗り出すように助言するべきである。これが両極勢力の本当の和解になる⁽¹⁴⁾。」

3-2 セークサンの第1講演（10月13日）

セークサンは1949年3月28日生まれであり、1973年政変当時はタムマサート大学政治学部の学生であった。彼は2013年には2度講演を行った。その概要を順に紹介したい。

セークサンは10月13日には「10月14日の意図は民主主義だったのか？」と題する講演を行った⁽¹⁵⁾。10月14日政変以後、民主化が円滑に進まない理由は、旧支配層、権威主義の政治文化、一貫性が足りない民主化勢力の3つであり、この3つは互いに関連し合っている。伝統的支配階層が民主主義に譲歩しようとしたくないのは、第1に、権力を温存したいからである。第2に、伝統的支配階層は従来の支配様式が民主主義よりも優れていると信じているからである。第3に、大衆のかなりの部分が、権威主義や恩顧関係といったものに執着し続けているからである。「旧来の政治文化にどっぷりと浸かった大衆の少なからぬ部分が、長期的な影響を顧慮することなく、代議制民主主義の手続きによらずに政権を打倒しようと要求したり、あるいはクーデタを少なくとも歓迎したりする可能性が常時存在している。」

タイで民主主義体制を守り安定させることができる社会勢力は誰であろうか。第1に、産業労働者の運動は1976年10月6日クーデタ後厳しい弾圧を受けて弱体になった。第2に、学生運動は、大学が1976年以後「中間層の幼稚園に改変された」ことも手伝って、低調になっている。第3に、「かつては進歩派勢力であった中間層は、今日では・・・自分たちが有利な時点で歴史を止めようとする保守勢力に変化した。」変化の主因は、経済成長で貧富差が拡大して、中間層が一段と裕福になったことであろう。第4に、農村部中間層である。人数が非常に多いにもかかわらず、支配階層からは無視されてきた。この「新中間層」は民主主義を不可欠としている。

近年の政治混乱が生じた理由は、「2006年当時の[タクシン]首相の過ちに一因がある。しかし、根本的には、権力を失った旧支配階層と、選挙で権力を掌握した新支配階層の対立である。この対立は、旧資本家集団、さらに首都の中間層と上流層の不満によって増幅された。その不満は、1つには新興資本家集団が主導する変化への懸念、もう1つには民主主義を護持しようとする意欲の欠落に由来していた。このため、2006年クーデタは社会の側に受け入れる素地があった。」

抵抗勢力を見誤っていたことが2006年クーデタの大きな過ちであった。「打倒した政権のポピュリズム政策の恩恵を享受していた地方の中間層と首都の下位中間層から構成される大衆を見過ごしていた。民主主義を護持しようとする知識人や一部の旧中間層も視野に入っていなかった。グローバル資本主義とともに成長した新支配階層の抵抗能力を見くびっていた。これらの要因のゆえに、2007年憲法を公布施行しても、混乱は簡単には決着しなかった。対立は一段と激しくなり複雑になった。社会は四分五裂状態となり、民主主義をめぐる対立が大衆にまで浸透した。」

セークサンの10月13日の講演の要旨は以上の通りである。この講演が赤シャツ系の10月14日委員会の主催であったせいもあろうが、赤シャツを民主化勢力として高く評価する内容になっている。民主主義には支えていく社会勢力が必要であり、それは今日のタイでは農村部の新中間層であると述べる。第2に、2006年以後に展開されているのは、旧来の支配階層とタクシンに代表される新興支配階層の権力闘争である。首都の中間層は、旧支配階層に加勢して、代議制民主主義の否定に賛同した。第3に、従来クーデタであれば新憲法の公布施行と総選挙の実施で政治が落ち着いたものの、2006年クーデタ後政治の混乱が続いているのは、失脚させられた支配者が泣き寝入りせず、それを支持する多数の国民がいるからである。

3-3 セークサンの第2講演

セークサンは、10月14日には「10月の夢:タイにおける自由、平等、正義を求めた40年」と題する講演を行った⁽¹⁶⁾。10月14日政変では、あらゆる階層や階級の国民が軍事政権と闘った。誰もが自由、平等、正義を求めており、民主主義がそれを実現してくれると期待していた。それから40年間、民主主義は「信じがたいほどに七転八倒の苦難を経てきた。」民主主義を不安定にしてきた一因は、「旧支配階層が権力を取り戻そうとした」ことである。1976年クーデタの後、78年憲法に基づいて再開された民主主義は厳しい制限をつけられていた。選挙が実施されても、首相は政党政治家ではなく、旧支配階層が選んだ人物であった。政党「政治家に期待されたのは店頭を飾り立てることだけであった。」学生や民衆の政治運動が低調になり、社会は平穏に見えた。タイの政治は1973年から20年間この「半業の民主主義」で立ち止まり安定していたように見受けられた。しかし、社会の急速な変化が政治に影響を及ぼすようになっていた。

第1に、官僚制（軍隊や官庁）幹部と実業家の支配同盟は、実業家出身の政治家が主導権を握ろうとするようになって、亀裂が生じた。官僚指導層は1991年クーデタで巻き返しを試みるものの、「政党政治家を内閣に取り込んで民主的な体裁を取り繕えば軍事政権が容認されるという環境はもはや存在しなかった」ため、激しい抵抗を惹起し、1992年5月

の惨事を招いた。政治改革を目指して1997年憲法が起草されると、主導権争いが再燃することになる。第2に、1990年代には経済格差が拡大して、下層階級が不満を募らせた。既存の政党政治がそうした不満を汲み取ることができなかつたため、住民運動型の政治(kanmuang phak prachachon)が活発になった。その声は1997年憲法にある程度盛り込まれた。

1997年の憲法と経済危機は政治に変化をもたらした。新興資本家は、1997年憲法の規定を活用して、具体的な政権公約を提示することで選挙に勝利して政権を握った。それによって、「新資本家とタイの選挙で最大の票田になる農村部の農民の間に信じがたい同盟が登場した。」経済的弱者である「農村部の新中間層は政府からの支援策を必要とした。」新中間層にとっては、「経済的な正義の追求は、政治的な駆け引き能力がなければまったく不可能である。」しかし、「そうした再配分政策は、誰かの助けを借りなくても裕福な資本家階級や首都の旧中間層にとっては必要がない。」「こうした食い違いが後に大きな対立を引き起こすことになる。」このため、代議制民主主義という「不利を克服する唯一の場が、2006年クーデタで破壊されると、そうした農村部住民が怒りや恨みを感じたのは不思議ではない。」「こうした事情が、黄色と赤色に分かれて対立する政治が始まり、それが今日まで続いている経済的社会的背景となっている。」

政治対立は、階層や階級の間だけではなく、民主政治観をめぐっても存在していた。住民運動型政治と代議政治である。「住民運動型の政治が代議政治から距離を置こうとするのに対して、農村部の新中間層の大衆政治は逆に代議政治を利用することで議院内閣制に生命力を吹き込んでいる。」セークサンによれば、この2つの潮流は補完し合って民主化を促進しうる。それによって、支配階層の政治関与を減らし、民主化を進めてきた。

民主化にとっての障害は他にも存在している。経済のグローバル化が経済的社会的な格差の拡大に拍車をかけており、階級・階層ごとの政治観を乖離させている。「著しい格差に基づいて養われる政治観は妥協し合うことが難しい。」たとえば、2006年クーデタへの賛否である。新中間層が反対したのに対して、首都の中間層は、多くが道徳にこだわるがゆえに好意的であり、一部が全面的に賛成した。2010年のバンコクにおける赤シャツ集会については、首都の中間層は赤シャツ群衆に嫌悪感を抱いており、手荒な取締りに反対しなかった。

「政治の混乱はごく少数の支離滅裂な人間のせいであると決めつけたり、汚職をなくしさえすれば国がよくなると思い込んでいるべきではない。」「もっと多くの問題を生み出しているのは、一部の少数者が偽計など用いなくても手に余るほど裕福になり、大半のものが怠けているわけではないにもかかわらず信じがたいほどに貧窮しているという格差だからである。」格差は今日のタイにとって最大の問題である。自由、平等、正義とい

う夢は40年前と変わっていない。しかし、世界が変化しており、コンセンサスが減っている。

セークサンはこの第2講演では、1973年以後の政治を鳥瞰した。1976年以後軍隊や官僚制が強い政治力を保持し、下院議員には首相就任を許さないような限定された民主政治を行った。しかし、やがて実業界の利害を代弁する政党政治家が政治権力の拡大を求めて軍隊や官僚制に挑戦するようになった。他方において、格差の拡大に伴い、庶民が1990年代からNGOとともに住民運動型の政治を展開するようになった。この政治の支持者は代議制民主主義に冷ややかである。しかし、農村部の新中間層は代議政治を支持する。住民運動型政治と代議政治の支持者は、補完し合って民主化を進めるべきながら、溝がある。もっと大きな溝は、富裕層と庶民の間にある。経済的な格差が拡大するにつれて、両者の政治観は隔たりが大きくなっている。

3-4 セークサンの「転向」

歴史学者のティカーンによると、1970年代の左派学生活動家が支持する政治観は1980年代になると、①道徳重視の仏教型民主主義、②コミュニティ重視のコミュニティ文化型民主主義⁽¹⁷⁾、そして③代議制民主主義の3つに分かれていく。①の主唱者はNGOに支持者が多い医者プラウエート・ワシー、②の中心人物はプレーム政権で活躍したテクノクラートのスメート・タンティウエーチャクンである⁽¹⁸⁾。1990年代になって③の代議制民主主義が定着し始めると、それに対抗するため①と②が協調して住民運動型の政治を唱えるようになった。この住民運動型の政治という表現が用いられるようになったのは1995年からである。タイにおいて市民社会賛美論者の間では、この参加型の政治の支持者が多い⁽¹⁹⁾。その基本的な特色としては、国家と資本主義に対する警戒や敵意であり、地方分権やコミュニティの権利を強調する一方、資本家の支配にすぎないとして代議政治へは冷ややかである。2006年にタクシン政権打倒のためにPAD（黄シャツ）が結成されたとき、NGOを動員することができる住民運動型政治の唱道者が幹部に迎えられた。代議制民主主義に立脚するタクシン政権を打倒するには、代議制民主主義に冷ややかな勢力が好都合だったからである⁽²⁰⁾。

講演者のセークサンはそうした住民運動型政治の主唱者の1人である⁽²¹⁾。セークサンはこの講演で、住民運動型政治を否定したわけではなく、代議政治との併用を主張したにすぎない。しかし、十月人の中にあつて代議政治に冷ややかであった代表的な人物が立場を改め、しかも「新中間層」と「新資本家」の「信じがたい同盟」を代議政治の担い手として持ち上げたことの衝撃は大きかった。これに黄シャツ派は落胆し、赤シャツは歓迎することになる。

赤シャツに関する社会学的な共同研究を先駆的に実施したユッティは⁽²²⁾、セークサンの講演を次のように評価する。「住民運動型政治の唱道者たちは、新興支配層の政治を激しく敵視してきた。彼らは資本主義に抵抗し、デモ行進や直接的な政治活動を通じた直接民主主義を要求し、選挙で選ばれた政治家への監査・監督を求めてきた。彼らは人民にとって何が最善なのかを一般人民よりもよく知っているると自負している。こうした住民運動型政治の主導者は、都市中間層の一部をなしている。それゆえに、従前からの住民運動型政治家は2006年「軍事」クーデタをためらうことなく支持したのであり、今後のクーデタも支持する。それが自由な資本主義の指導者である新興支配層の権力打倒を狙った行動だからである。」ユッティによれば、セークサンは、この講演で、それまで属してきた都市中間層における社会主義と住民運動型政治から一歩距離を置き、新中間層の自由主義や代議制民主主義との間の軌轢を修復しようと試みていた。

4 2006年クーデタと賛否両論

4-1 黄シャツからの反発

セークサンの講演にもっとも激しく反発したのは黄シャツであった。黄シャツの指導者ソンティ・リムトーンクンは2013年10月18日に自社ASTVの討論番組に出演し、いつも通り口汚く、セークサンをこき下ろした⁽²³⁾。「今回の講演は、セークサンが40年間の眠りから覚めて古くさい理論を思い出して話したに過ぎない。」第1に、セークサンは新資本家と新中間層の協力を言及したが、「倫理や道徳にはまったく触れなかった。」第2に、「旧資本家に言及したが、旧資本家などもはや存在しない。今日猛威をふるっているのは下劣な資本家(thun saman)つまり新資本家である。」第3に、「不平等解消を求める赤シャツを好意的に評価しているものの、赤シャツの政権が相続税を導入せず、土地改革をしないのはなぜなのか。」どこが10月14日政変の精神を継承なのか。第4に、「9月19日クーデタが国にとって重大な失敗であったというが、国会において数を頼んでタックシンに恩赦を与えようという法律を作ろうとしている地獄の獣たちは「軍事独裁政権と並ぶ」もう1つの独裁ではないのか。」第5に、「PADは変化を拒否する連中であるというが、PADは変化を最も強く願っている人びとである。」「セークサンは従来通り沈黙を守った方がよい。表に出てきて何かを話すべきではない。」「セークサンは頭が空っぽであり、まったく歴史上のゴミであることがはっきりと証明された。」

これに先って10月15日に、ASTVは2名の論客を招いてセークサンの講演を論評する番組を放送していた⁽²⁴⁾。1人はNIDA(国立開発行政大学院)で学部長を務めるピチャーイ・

ラッタナディロック・ナ・プーケットである。彼は、「セークサンが新中間層を10月14日精神の継承者と捉えるのは間違いである。」「赤シャツには階級意識が欠落しており」、「プアタイ党に盲従しているにすぎない」と断罪した。赤シャツとタックシンの「信じがたい同盟」は、民主化勢力ではない。「新中間層は下劣な資本家が購入して畜舎で飼育し餌を与える家畜である。」ポピュリズム的な再配分政策という餌を失うことを恐れてクーデタに反対しているに過ぎず、2010年の闘争は飼い主を守ろうとする行動に過ぎない。

赤シャツは「国民の多数派ではない。赤シャツの主人一味が政治権力を利用して資源を収奪している相手こそが多数派である。」赤シャツは「階級利益を守ろうという階級意識がないため、土地改革や税制改革を政権に求めようとしない。」「赤シャツは不平等の是正を運動の大義にしているものの・・・まやかしに過ぎない。」不平等の主因は、セークサンが指摘するグローバル資本主義ではなく、汚職である。赤シャツが主因たる汚職資本家と同盟するのは矛盾である。

もう1人は、2006年クーデタ後に論功行賞で官選国会議員に任命されたPAD幹部プラパン・クンミーである。彼によると、タックシンと赤シャツが民主化勢力という説明は全く間違っている。中間層が多数参加するPADこそが、「旧支配階層と腐敗新支配階層という2つの独裁勢力」に対抗する民主化勢力である。「PADは国王を元首とする民主主義体制のために闘っており、それゆえに、軍事独裁や資本家独裁を打倒しようとしている。」都市中間層は保守反動勢力ではない。「クーデタでタックシン政権が打倒されても、民主主義体制は残った。軍隊は憲法を起草し、民主主義に復帰し、選挙を実施した。」「このため、国民は溜飲を下げたのであり、クーデタを歓迎したのである。」悪党同士の争いにすぎないので、「国民は満足した。」

「セークサンは、赤シャツが10月14日政変の精神を継承して民主化を進める中間層だという。」しかし、「PADの集会には中間層が多数参加している。」「タイで暮らしを立てていこうとすれば、タックシンの一族に依頼し袖の下を渡さないと仕事を得られない。これは自由への脅威である。」「PADの闘争は、自由や生存権を脅かされ、新支配階層にすべてを支配されることに抵抗する中間層の闘争である。」こうした中間層をなぜ民主化勢力とみなさないのか。また、「タックシンという独占資本は軍隊よりも悪しき権威主義であり、中間層に危害を加えて破壊する。赤シャツが新中間層であり、PADが旧中間層であるとしても、いずれも中間層であり、独占資本の政治体制の打撃を受けるので」、協力が可能である。

彼ら3名の意見からは、PADに特徴的な考え方を窺うことができる。第1に、政治対立は汚職政治家の新支配層と軍隊の旧支配層を当事者としており、旧支配層はすでに力を失っているので、脅威ではない。タックシンに代表される「下劣な」資本家を打破するた

めであれば、クーデタも容認する。第2に、PADは民主主義よりもタックシン打倒を優先する。民主化勢力か否かは、反タックシンかどうかで決まる。第3は、肝心なのは民主化勢力かどうかではなく、中間層かどうかである。中間層はア priori に民主化勢力である。PADのデモへの参加者にとっては、中間層に属していると自他共に認められることが重要ということになる。中間層と括られるカテゴリーに、赤シャツのような異物が紛れ込むことには拒絶反応を起こす。

4-2 政治家になった学生活動家

十月人には政治家財界などで活躍する人物が多い。たとえば、2010年から中央銀行総裁を務めるブラサーンは10月14日政変当時にはチューラーロンコーン大学工学部の学生であり、同大学学生自治会の会長であった。政界では与野党双方に散らばっている。2013年10月14日付けの経済紙は閣僚経験のある2名が40年間の政治を回顧するインタビューを掲載した⁽²⁵⁾。1人はチューラーロンコーン大学法学部在学中に1976年10月6日政変で銃撃を受けて負傷し長期療養を強いられたウィッターヤー・ケーオパラダイである。彼は1988年に初当選し、2008年発足のアピシット政権で公衆衛生大臣を務めた。もう1人はチェンマイ大学医学部在学中の1976年に同大学学生自治会会長であったチャートウロン・チャーイセンである。彼は1986年に初当選しており、インラック政権では2013年から教育大臣を務めている。

ウィッターヤーによると、「打破すべき主たる敵は、40年前には資本主義とサクディナー制（マルクス主義歴史観における封建制の訳語、引用者）であった」が、「サクディナー制は経済面ではほぼ消滅して今日では文化的な構造しか残っていないので」「資本主義だけになった。」40年間で、「資本主義の浸透が進み、資本家こそがもっとも完璧な独裁になっている。今後、決起して、そうした資本家連中と戦わなければならない。」彼によると、資本家による支配は強靱である。「軍事独裁は壊れやすい。幾重にもかさなっているわけではなく一重にすぎない。今日国家権力を握っている人物は、自分でビジネスをしており、商売人であって、誰かから便宜供与を求められることはなく、利益を独り占めしている。これを打倒することは容易ではない。彼は選挙を通じて権力を握っている。」そうした悪政のゆえに、「社会からは規律や秩序が失われ」、「道徳や善が軽視されている。」「権力を求める悪い人物と、道徳的な人物がいた場合」、あるいは「善人と金持ちがいた場合、今日では、半分以上の人々が金持ちと親しくしようとする。」「資本主義制度には道徳の象徴を見いだせない。・・・残存するサクディナー制は道徳の象徴となる代表的な人物を挙げることができる。」このように、かつての軍事政権も、それに代わって登場してきた資本家を代弁する代議制民主主義も共に容認できず、善人の支配を希求するとい

うのがウィッタヤーの考え方である。

チャートゥロンによると、「学生たちは10月14日政変直後には社会主義の影響を受けており、議会政治を否定した。」「十月人の一部は今でもそのように考えており、議会政治を否定している。しかし、議会政治を否定して、何を代わりに持ってくるのかははっきりとしない。」「十月人の一部は代議政治を否定し、善人を支持する。彼らは選挙が打開策にならず、選挙が民主主義というわけではないと考えている。彼らはそれゆえ善人を支持する。」チャートゥロンはこうした状況を、「十月人の中には、独裁を支持し、民主主義に抵抗し、民主的な憲法を支持しないものが多い。十月人はもはや英雄ではないというだけにとどまらず、国の進歩を遅らせ、国民から機会を奪い、国民が権利を享受できない支配体制を作ろうとしている。これでは到底英雄とは呼べない」と嘆いている。

このことは、2006年クーデタをどう捉えるかという問題と密接に関連している。チャートゥロンは、10月13日にセークサンと同じ講演会で、「タイの民主主義の過去・現在・未来」と題する講演を行っていた⁽²⁶⁾。彼によると、タイの民主主義は1932年立憲革命に始まり、前進後退を繰り返してきた。国民の支持を受ける強い政党による支配という1997年憲法の狙い通りの政権が登場したものの、「2005年に一部の勢力が不満を抱いて政権打倒運動を始め、2006年9月19日のクーデタにつながった。」「そのクーデタには5つの特色があった。」第1に、かつては民主主義を求めていた知識人の一部が変節し、手段を問わず政権交代が必要であると主張するようになった。第2に、クーデタの指導者ソンティ大将には実権がなかった。「周囲の人びとが権力を握っていた。ソンティ大将よりも上位に彼よりも権力を握るものが溢れていた。ソンティは小物に過ぎなかった。それが「伝統的支配層(ammatt)」と呼ばれるものである。」第3に、司法が支配に利用された。政治の司法化は、諸外国では、国民の権利や自由の拡大というよい意味で用いられている。タイは正反対であり、司法が国民や政治に打撃を与えている。第4に、国民主権を否定するために、策をめぐらした方法で2007年憲法を起草した。第5に、クーデタ後には民主化の推進派と抵抗派の間で勝敗が決まらず膠着状態が続いている。立法府や執政府と異なり、国民からの監査をまったく受けない司法機関が、国民の審判を受ける国民代表からなる立法府や執政府にチェックを加えるといういびつな形になっている。その見直しに必要な憲法改正を試みると、憲法裁判所に阻止されるということになっている。

5 自己陶醉

5-1 政権打倒運動

2013年の10月から恩赦法反対闘争が盛り上がった。当初は限定されていた恩赦の対象が、国会の審議過程で大きく拡大されたためである。包括的恩赦法に真っ先に反対したのは、100名近い死者を出した2010年デモ当時の政権首脳への恩赦を許すまいとする赤シャツであった。デモ隊の死亡原因が兵士の発砲であるという裁判所判決が相次いで下るようになっており、軍隊に取締を命じた当時の民主党政権幹部（治安担当副首相であったステープラ）への刑事責任追及が始まろうとしていたからである。しかし、恩赦法は、殺人罪容疑の民主党幹部らによって、夫人が国有地を競売で落札したことが利益相反に問われて実刑2年の判決が確定したタックシンのための法律と読み替えられた。この修正恩赦法案が11月1日未明に下院で可決されると、反対運動が盛り上がった。

強い抵抗を目の当たりにして政権側が恩赦法可決を断念したため、上院は11月11日に恩赦法案を否決した。すると、民主党は幹部のステープラ9名が下院議員を辞職して、街頭でのデモ集会を一段とエスカレートさせた。上述のウィッターヤーはその1人であった。恩赦法に加えて、反政権運動に油を注いだのが憲法改正であった。与党は、総選挙での政権公約に基づいて2012年には憲法の全面改正を目指したものの、憲法裁判所が全面改正は違憲であり、個別の条文ごとに改正するべきとの判断を下したため、それに基づいて2013年には条文ごとの改正に乗り出した⁽²⁷⁾。上院議員を官選と民選の半数ずつから全員民選に変更しようとする憲法改正案について、国会は上下両院の358名の賛成を得て2013年9月28日に可決した。この改正案を憲法裁判所が11月20日に違憲と判断した。法律に定められた手続きに基づいて下院で起草され可決された改正案を違憲と判断する権限は憲法裁判所にはないというのが、多くの法律学者の考え方であった⁽²⁸⁾。与党は憲法裁判所の決定に従わないという姿勢を示すことで、反政府勢力にさらなる攻撃目標を与えることになった。

ステープラは11月24日には運動の目標を政権打倒へと変更した。恩赦法反対には理がある。だが、11月25日以後の官庁の占拠、放送局への押し入り、首相府や首都警察司令部の攻略戦となると、重大な犯罪行為である。ステープラは11月29日には反政府勢力の多くを糾合して「国王を元首とする完全な民主主義体制へとタイ国を改革するための国民委員会(PDRC)」を結成した。2006年クーデタを実行した「国王を元首とする民主主義体制改革委員会」を想起させる名称であり、王室との関連を連想させた。政府は圧力に押されるように、12月8日になって、国王の裁可を求めていた改正案を12月2日付けで撤回することになる。さらに、12月9日には国会を解散して、民意を問うことにした⁽²⁹⁾。それでもステープラは攻撃の手を緩めるところか、むしろ勢いづいて、12月10日夜に、首相の失職を宣言し、

それに応じて辞任しない首相を謀反容疑で訴追すると宣言し、官庁の警備を警察から軍隊に交代させる命令を下した⁽³⁰⁾。クーデタを実行した軍隊を彷彿させるかのような声明文であり、国家転覆を狙う内乱罪に該当する行為であったといえよう。ステープは、多くの国民がデモ隊を支持していると強弁してみても、実は少数派に過ぎないことを十分に承知しているため、選挙の前に政治改革を実施するべきであるとしてデモを続けた。

ステープや民主党が要求する政治改革は内容が明らかにされていない。英字紙ネーションなどを擁するメディア・グループの編集主幹は、2013年12月21日に同社のタイ語経済日刊紙に寄せた「アウンサンスーチーの態度表明：ルールを変えなければ、選挙をボイコットする」というエッセイで、不公平な政治制度とりわけ選挙制度を見直さなければならぬと主張して、民主党を応援した⁽³¹⁾。予備知識がなければもっともな高説ながら、これは事実と照らし合わせると暴論である。現行の2007年憲法は反タックシン派がタックシン派の復活阻止のために起草したものである。民主党は軍事政権からの追い風をもらいながら、2007年総選挙で敗北した。同党は2008年12月に憲法裁判所と軍隊の力を借りて政権を握り、2011年には有利に選挙戦を展開しようという思惑から憲法を改正して選挙制度を改革して選挙戦に臨んだものの、またしても敗北した。タックシン派は2007年も2011年も野にあり、国家権力を不当に濫用して選挙に勝ったわけではない。自由や公平に不足があったとすれば、その恩恵に浴したのもっぱら民主党であった。それでも敗北したのであるから、2014年2月に予定される選挙が自由で公平に行われる限り、野に下った民主党の勝ち目は限りなく乏しい。選挙で選ばれたタックシン派政権を非民主的に強引に打倒しても、綻びかけたタックシンと赤シャツの結束を再び強化することになる。つまり、選挙の否定や軽視は敵に塩を送る行為に等しい。それゆえ、民主党が選挙で負けても政権を握ろうとすれば、自由で公平な選挙を止めるか、選挙結果とは関係なしに首相を選ぶ仕組みを導入するしかない。それが改革であろう。

5-2 自己陶醉

恩赦法や憲法改正への反対は、2006年クーデタの支持者にとっては自然なことであった。タックシン体制打倒というスローガンも、その意味内容の曖昧さはさておき、タックシンを毛嫌いする人びとにとっては首肯できることであった。しかし、政権側が恩赦法も憲法改正も断念し、国会を解散した後も、選挙を拒否して政権打倒のためのデモ集会への結集を呼びかけ続けた。彼らの要求は、一方では国王大権に基づいて善人の非政党人を新首相に任命すること、他方ではタックシン派支配を根絶するための政治改革を実施することであった。これは、代議制民主主義や立憲主義の枠から逸脱しており、脱民主化のためのデモであった。

選挙以外の方法で政権を再び倒そうとする民主党と黄シャツの連合軍は、彼らが糾弾する「多数者の暴政」に代わる「少数者の暴政」という冷静に考えると身も蓋もない要求への賛同者を募る必要があった。それが簡単に見つかるのが今日のバンコクである。具体的には、ホイッスルを吹きながら喜々として参加してくれるいわゆる人びとである。彼らは非合法非民主的な政権打倒運動になぜ参加するのであろうか⁽³²⁾。参加に価値や意義を感じているからではなかろうか。

デモ集会の主催者の間では、当事者以外にとってはまことに奇異と思われる発言が繰り返されている。それは同じタイ人でありながら、自分たちは選良、あいつらは愚民、という露骨な差別意識である。タイで一番の発行部数を誇る総合週刊誌『週刊マティション』の2013年12月20日号の表紙を飾ったのは2人の知識人の写真であり、「1人1票の原則はタイ人には使えない」と大書されていた。そのうちの1人は、1973年10月14日政変当時のNSCT書記長ソムバットである。彼は政治学者としてNIDAに勤務し、2007年からは学長も務めていた。彼は政治的な立場が明確な研究者であり⁽³³⁾、ステープのPDRCの顧問の1人として、「1人1票という民主主義の原則」について2013年12月11日に次のように語った。「この原則を諸外国で使うとよい政治家が得られる。悪い政治家がいた場合には、国民が審判を下すことができる。タイでこの原則を用いるとなぜだか悪い政治家のほうが多くなってしまふ。悪い政治家、正しくない政治家がおり、不正の証拠が明確な場合にも、強情に認めようとせず、罷免ができない。それがなぜなのかは1人1票の原則を支持する人々に尋ねないと分からない。」「タイ国民は間抜けというわけではないけれども、日々の暮らしで精一杯であり、善人の選りすぐりについてあまり考えることができない。」「民主主義体制はそれぞれの国の文脈に応じて異なっている。タイはタイの文脈にそった民主主義体制を設計する必要がある。さもないと問題を解決できない。代議制民主主義は、国民が善人を選んで支配を委ねられるものでなければならない。なぜとって、善人だけが国民のために善行をなすように権力を行使するからである。もし悪人を選んでしまったら、今日タクシン体制がその実例となっているように、その権力を行使して自分や仲間の利益追求を図るであろう⁽³⁴⁾。」

もう1人は、PAD幹部の研究者セーリー・ウォンモンター（タムマサート大学の元ジャーナリズム学部長）で、PDRCの集会に日参している。彼は「バンコクの30万票は上質な票である。地方の低質な150万票よりも優れている」と語ったと報じられている⁽³⁵⁾。ソムバットも2013年12月15日付けの経済紙に掲載されたインタビューで、「与党は選挙で獲得した150万票が多数派の声だと主張している。しかし、タイの人口は6800万人であり、150万で多数派などとなぜ言えるのか。それはレトリックに過ぎない」と述べて、150万票の価値を否定している⁽³⁶⁾。

タックシン派政権を容認しないのは、タックシン派が獲得した票と反タックシン派が獲得した票の価値を同じとは考えていないからというわけである。タックシン派の票の価値が低い理由は、PDRCの集会で花形となっているイギリス帰りの女性が語ってくれている。それは、隣国マレーシアのスター紙が2013年12月17日に報じたものである。彼女はシンハー・ビールの製造販売で有名なブンロート社を所有するピロムパックディー一族の令嬢チットパットである。彼女は2011年総選挙では民主党の公認を得てバンコクで立候補して落選したことがあり、同党の広報担当を務めたことがあった。彼女はその記事の中で、「私たち民主党は民主主義を否定しているわけではない。民主主義に乗り出す前に、改革のための時間を少し必要としている。」彼女によれば、自由で公平な選挙を実施する前に、汚職や票の売買といった問題を解決する必要がある。問題は、「多くのタイ人、とりわけ地方の住民が、民主主義をきちんと理解していないことであった⁽³⁷⁾」。ブンロート社の社長は、国民の多数派を占める地方住民を無知と罵ったことが深刻な営業妨害になりかねないと受け止めて、同社役員を務める彼女の父親に12月18日付けで警告の文書を送付した他、広報に努めた⁽³⁸⁾。

多くのタイ人が公然と口にして憚らない差別意識や優越感が、タックシン派政権打倒デモへ2006年にも2008年にも2013年にも参加する大きな理由ではなかろうか。第1に、彼らは地方住民や赤シャツに対して強烈的な差別意識を抱いている。地方住民は無知で学歴が低く貧しい。そうした地方住民が選挙でタックシン派に投票するのは騙されたり買収されたりしているからにすぎない。第2に、そうした選挙で勝利するタックシン派には民主的な正当性を認めるべきではない。第3に、自分たちが帰属していると信じる都市中間層は、裕福で学歴が高く知識が豊富で政治を熟知している。これらはいずれも根拠のない思い込みに過ぎず、事実と反している可能性も高い。根拠薄弱であるからこそ、優越感を確証する機会が欲しい。それが反タックシン派のデモ集会への参加である。そこにはタックシン派はいない。集まってくるのは、上質な中間層と自他共に認められたい人びとである。別の表現をすれば、デモへの参加は彼らが理想とする「善人」の証明であり、「民主的な」「中間層」の証明でもある。これが何かに取り憑かれたように喜々としてデモに参加する理由であろう。

タックシン派の赤シャツが下種な連中であることを確認できれば、喜びを倍加させることができる。それを示唆する逸話がある。ステープのPDRCに対抗するために、赤シャツは2013年11月30日にバンコク郊外のスタジアムで集会を開いた。ラームカムヘーン大学の近くである。参加者の中年女性の1人が、日当200バーツで雇われて集会に参加した、と証言する動画が直後にインターネットに流れた。その女性は赤シャツの間では有名な東北地方の現職県会議員であった。彼女たちは帰途についたところで車両を止められ暴力を

ふるわれて、民主主義の意味を分かっているのか、国王を敬愛しているのかなどとさんざん詰問され、この「自白」を強要されていた。県会議員は、赤シャツ狩りに身の危険を感じて、身柄を拘束される直前に議員の身分証を破棄していた。同大学に通う議員の娘は、学友から、東北人は馬鹿だ、赤シャツは馬鹿だ、教育程度が低いと誹られると悲しいと述べている⁽³⁹⁾。東北地方出身の知識人も首都中間層の高慢さを批判し、「地方住民を見下すのを止めるべきだ。・・・[東北地方住民の大半を占める] ラーオ系タイ人を敵視する限り、民主党は選挙では勝てない。仲良くすれば、いつかはタクシン体制を倒せるだろう」と述べている⁽⁴⁰⁾。

首都住民の間で蔓延する差別意識は、10月14日政変で目指された平等がある程度実現しつつあることの裏返しであろう。1990年代以後の変化は著しい。政治は民主化が進み、2001年以後は多数派である地方有権者の声が国政に反映されやすくなった。教育面では師範学校や高専が大学に格上げされ、地方出身の大卒者が増えつつある。経済面では、地方でも農業従事者に代わって給与所得者や自営業者が増えて、生活の足がかつてのバイクからピックアップトラックや乗用車へ変化しつつある。農村部住民や都市下層民は、経済的社会的境遇が改善されている。セークサンはそれらの人びとを「新中間層」と呼んだ。アピチャートらの「新市民」やニティの「下位中間層」といった先行研究の成果を踏まえてのことである⁽⁴¹⁾。こうした押しとどめがたい平等化の進行ゆえに、ことさらに差別意識を露わにし、政治面での平等化を人為的に押しとどめようとしているのではなからうか。

注

- (1) 拙稿「サヤーム防衛団とは何だったのか」『タイ国情報』47 (1) (2013年1月): 1-10頁。
- (2) Phatcharapha Tantracin, *Khwamkhit thang sangkhom kanmuang khong seksan prasotkun* (Bangkok: Samnakphim Praphansan, 2013), pp.71-74.
- (3) Wasit Detkunchon, “Khroprop 40 pi khong wan mahawippayok”, *Matichon* (online edition), Oct 16, 2013 (http://www.matichon.co.th/news_detail.php?newsid=1381833096&grp_id=&catid=02&subcatid=0207).
- (4) 10月14日の宮殿と民主記念塔の周辺での実弾発砲に関して、タノーム政権側の仕業ではなく、軍隊内部の反タノーム勢力が政権打倒のために仕組んだことであるという見方もある。Pracha Buraphawithi, “Khwamlap 40 pi tula”, *Krungthep Thurakit* (online edition), Oct 11, 2013. (<http://www.bangkokbiznews.com/home/detail/politics/opinion/politic-view/20131011/535577/%E0%B8%84%E0%B8%A7%E0%B8%B2%E0%B8%A1%E0%B8%A5%E0%B8%B1%E0%B8%9A-40-%E0%B8%9B%E0%B8%B5-14-%E0%B8%95%E0%B8%B8%E0%B8%A5%E0%B8%B2.html>).
- (5) Samnakngan Lekhathikan Ratthasapha, *60 pi ratthasapha* (Bangkok: Aksonsamphan, 1992), pp.90-92, 152-157.
- (6) 左派の歴史家ソムサクは王権強化を強調しすぎることに警鐘を鳴らす。第1に、1973年の

政変で、「君主制の地位が著しく高まったのは事実である。」しかし、君主制の地位は言われるほどに強くなってはいなかった。」君主制が軍隊への完全なヘゲモニーを確立するのは10年後のことである。政変後には「左翼の勢力が伸張し、君主制に『脅威』となっていた。」この一事だけでも『勝利』とはいえない。第2に、君主制と軍首脳『同盟』を軽視している。「10月13日の午後に・・・国王は拝謁した学生指導者に集会を解散するように助言を与えた。」「学生が陛下の助言通りに行動していれば『10月14日政変』は発生していなかった。」しかし、学生は集会を解散しなかった。「学生の指導権は、陛下に拝謁した正式な指導者たち（ソムバットたち）にはなく、急進派（セークサンたち）の掌中にあったからである。」学生が民主記念塔からチトラダー宮殿前へ移動したのは、運動の目的が13名の釈放や憲法制定から、政権打倒へ変化したことを意味していた。学生運動の正式な指導者は大半が穏健な勤王派であった。彼らが運動を掌握できていれば10月14日政変は生じなかった。Somsak Ciamthirasakun, “Yaeng phichit likhitkitcasombun: 14 tulakhom 2516 khu chaichana khong phalang caritniyom thai?”, *Thai E-News*, Oct 11, 2013 (http://thaienews.blogspot.jp/2013/10/14-2516_11.html).

- (7) “40 pi 14 tula: lae laeo khwamkhluanwai ko prakot”, *Thai E-News*, Oct 3, 2013 (http://thaienews.blogspot.jp/2013/10/4014_10.html).
- (8) Kanokrat Lertchoosakul, “The Rise of the Octobrists: Power and Conflict among Former Left Wing Student Activists in Contemporary Thai Politics”, Ph.D.thesis, The London School of Economics and Political Science, 2012.
- (9) Ibid., chapters 4 and 5. 彼女は、NGO拡大の要因として、外国からのNGO援助が1977-81年には1011万ドルであったものが、次の5年間には4428万ドル、その次には8017万ドルと急増し、通貨危機前の5年間（1992～1996年）にも8174万ドルと高水準にとどまったことを指摘している。P.172。
- (10) 拙著『民主化の虚像と実像』京都大学学術出版会、2003年、2章。
- (11) 歴史学者のティカーンによると、この表現を最初に用いたのはセークサンであり、1996年の10月6日政変から20年目の講演でのことであった。“14 tula ik mum nung thikan sinara chuan khit panyachon luang - daeng”, *Matichon* (online edition), Oct 6, 2013 (http://www.matichon.co.th/news_detail.php?newsid=1381044064&grpId=&catid=01&subcatid=0100).
- (12) 報告者には2009年に『10月6日以後』を出版したティカーン・シーナーラー、2012年にイギリスのLSEへ「十月人」に関する学位論文を提出したばかりのカノックラット・ルートチューサクン、若手実業家タナートーン・チュンルンルアンキットらが含まれていた。“Sammana lang 6 tula”, *Thai E-News*, Oct 2, 2013 (<http://thaienews.blogspot.jp/2013/10/14.html>).
- (13) “Thirayut bunmi wiphak 40 pi tula waduai 'khi' 'maeo khikha khibae”, *Matichon* (online edition), Oct 15, 2013, (http://www.matichon.co.th/news_detail.php?newsid=1381814578&grpId=01&catid=&subcatid=).
- (14) ティーラユットの講演は、政権関係者からは反発を招いたものの、学者からの反響は大きくなかった。タックシン支持派のウェブサイトは、左派歴史学者ソムサクが2007年に書いていた「10月14日政変への寄生虫」という文章を、2013年10月15日に転載した。記者会見を開いて風変わりな用語を紹介し記事にしてもらおうというティーラユットの行動を批判する内容であった。「ティーラユットは、『記者会見』を開き新聞の見出しを飾るにふさわしいような関心や尊敬に値することを10月14日政変以後に何かしたであろうか。皆無である。」「ティーラユットがここ20年間に行ってきたことは、折に触れて『記者会見』を開くことだけであった。彼にこれが可能なのは、10月14日政変への寄与で有名だからである。」「多数の活動家や大衆が血肉を捧げた『10月14日という木』を寄生虫のように『食物』にしているのである。Somsak Ciamthirasakun, “kafak 14 tula”, (originally posted on July 21, 2007), *Thai E-News*, Oct 15, 2013 (http://thaienews.blogspot.jp/2013/10/14_15.html).
- (15) “Seksan prasoetkun pathok 40 pi 14 tula cho cut yun po.cho.to.”, *Matichon* (online edition), Oct 14, 2013 (http://www.matichon.co.th/news_detail.php?newsid=1381735212&grpId=01&catid=&subcatid=).
- (16) “Pathakatha seksan 40 pi khwamfan duan tula”, *Post Today* (online edition), Oct 14, 2013

(<http://www.posttoday.com/%E0%B8%81%E0%B8%B2%E0%B8%A3%E0%B9%80%E0%B8%A1%E0%B8%B7%E0%B8%AD%E0%B8%87/253009/%E0%B8%9B%E0%B8%B2%E0%B8%90%E0%B8%81%E0%B8%96%E0%B8%B2%E0%B9%80%E0%B8%AA%E0%B8%81%E0%B8%AA%E0%B8%A3%E0%B8%A3%E0%B8%84%E0%B9%8C-40%E0%B8%9B%E0%B8%B5%E0%B8%84%E0%B8%A7%E0%B8%B2%E0%B8%A1%E0%B8%9D%E0%B8%B1%E0%B8%99%E0%B9%80%E0%B8%94%E0%B8%B7%E0%B8%AD%E0%B8%99%E0%B8%95%E0%B8%B8%E0%B8%A5%E0%B8%B2>).

- (17) コミュニティ文化論については、重富の明解な研究がある。重富真一「タイにおけるコミュニティ主義の展開と普及：1997年憲法での条文化に至るまで」『アジア経済』20（12）（2009年12月）：21-54頁。
- (18) この両者については、ピンヤーパーン（Phinyaphan Photcanalawan）による優れた研究がある。“Ammattayanutsati koet kae tai cak 79 pi chattakan prawet wasi thung moranakam phutthathat pi 2536”, *Prachathai*, Aug 5, 2011 (<http://prachatai.com/journal/2011/08/36366>) ; “Hok klap chiwit ammat hok rop naksat sumet tantiwetchakun”, *Prachathai*, Aug 26, 2011 (<http://prachatai.com/journal/2011/08/36646>).
- (19) セークサンの政治思想を研究したパッチャラーパーによると、住民運動型政治は、「市民の政治、市民社会、直接民主主義、住民基礎型政治」とも呼ばれる。Phatcharapha , op. cit., p.234.
- (20) “Kep khwam sewana lang 14 tula: fai sai nakkitcakam thai lang yuk pho.kho.tho. thammai hanha naeo khit anurakniyom”, *Prachathai*, Oct 5, 2013 (<http://www.prachatai.com/journal/2013/10/49090>).
- (21) 彼は2005年の著書で、住民運動型政治を「国家の支配基盤を弱体化させ、一部の権力を国家から住民に移して直接的な自己管理能力を高めるために、住民グループによる政治意識をもった運動」と定義している。Seksan Prasoeakun, *Kanmuang phak prachachon nai rabop prachathipatai* (Bangkok: Samnakphim Wiphasa, 2005), p.169.
- (22) Aphichat Satitniramai, Yukti Mukdawicita, and Niti Phawakkhaphan, “Rainganwicai chabap sombun: Khrongkanwicai thopthuan phumithat kanmuang thai (Final Report: Re-examining the Political Landscape of Thailand)”, 2013.
- (23) “Sonthi sat seksan khaya thang prawatisat tuan thun cin buk tham khon thai chiphai pram pu ya fri wisa detkhat”, *ASTV Phucatkan Online*, Oct 19, 2013 (<http://www.manager.co.th/Politics/ViewNews.aspx?NewsID=9560000131039>).
- (24) “Kham to kham praphan - phichai to pathakatha seksan chi mai du boribot patcuban - sapsan nai tua eng”, *ASTV Phucatkan Online*, Oct 16, 2013 (<http://www.manager.co.th/Politics/ViewNews.aspx?NewsID=9560000129631>).
- (25) “Song mai tai ton 40 pi khon duan tula caturong wittaya 2 phalittaphon bon thang 2 si”, *Prachachat Thuraki* (online edition), Oct 14, 2013 (http://www.prachachat.net/news_detail.php?newsid=1381740640).
- (26) Caturong Chaisaeng, “Adit patcuban anakhot prachathipatai thai” (Pathakatha 40 pi 14 tula), *Prachathai*, Oct 13, 2013 (<http://www.prachatai.com/journal/2013/10/49228>).
- (27) 拙稿「果てしない権力闘争：憲法改正をめぐる一コマ」『タイ国情報』46（3）（2012年5月）：1-8頁。
- (28) 代表的なのは、ウォーラチュートが率いる民衆法学グループである。彼らは一方では包括的恩赦法案を批判し、他方では憲法裁判所判決を厳しく論難した。“Thalaengkan nitirat ruang khamwinitcai san rathathammanun karani kaekhaiphoemtoem rathathammanun kiokap kandaima sung samachik wutthisapha”, *Prachathai*, Nov 23, 2013 (<http://www.prachatai.com/journal/2013/11/49940>)。かねてから裁判所の判決の是非を積極的に論じてきた知識人ばかりではなく、従来は沈黙してきた知識人からも批判の声がわき上がった。たとえば、サヤーム大学のエーカチャイは、判決が新憲法起草に等しいと批判した。Ekkachai Chaianuwat, “San rathathammanun khian rathathammanun mai phan khamwinitcai 20 phrutsacikayon 2556”, *Prachathai*, Nov 20, 2013 (<http://prachatai.com/journal/2013/11/49888>) ; Atiya Achakulwisut, “Democracy lies with the people, not the court”,

Bangkok Post (online edition), Nov 26, 2013.

- (29) 解散時期が12月9日とやや遅かったのは、2008年12月2日に解党処分を受けた政党の幹部が5年間の休職処分が解けて、下院議員選挙に立候補することが可能になるからであった。
- (30) “Thalaeng chabap thi 2 suthep rukkhat damnoen khadi pu than pen kabot mai yom la ok sang adun thon kamlang to.ro. song thahan ma thaeen”, *Matichon* (online edition), Dec 11, 2013 (http://www.matichon.co.th/news_detail.php?newsid=1386726734&grpId=&catid=01&subcatid=0100).
- (31) Kafaed Dam, “Aung San Su Chi sadaeng cut yun: mai patirup katika tong khwam bat luaktang”, *Krungthep Thurakit* (online edition), Dec 21, 2013 (<http://www.bangkokbiznews.com/home/detail/politics/opinion/suthichaiyoon/20131221/551211/%E0%B8%AD%E0%B8%AD%E0%B8%87%E0%B8%8B%E0%B8%B2%E0%B8%99%E0%B8%8B%E0%B8%B9%E0%B8%88%E0%B8%B5%E0%B9%81%E0%B8%AA%E0%B8%94%E0%B8%87%E0%B8%88%E0%B8%B8%E0%B8%94%E0%B8%A2%E0%B8%B7%E0%B8%99-%E0%B9%84%E0%B8%A1%E0%B9%88%E0%B8%9B%E0%B8%8F%E0%B8%B4%E0%B8%A3%E0%B8%B9%E0%B8%9B%E0%B8%81%E0%B8%95%E0%B8%B4%E0%B8%81%E0%B8%B2%E0%B8%95%E0%B9%89%E0%B8%AD%E0%B8%87%E0%B8%84%E0%B8%A7%E0%B9%88%E0%B8%B3%E0%B8%9A%E0%B8%B2%E0%B8%95%E0%B8%A3%E0%B9%80%E0%B8%A5%E0%B8%B7%E0%B8%AD%E0%B8%81%E0%B8%95%E0%B8%B1%E0%B9%89%E0%B8%87.html>).
- (32) 現代タイを代表する知識人ニティは、ハンナ・アーレントに依拠して、デモ集会参加者を全体主義体制樹立へ力を貸すアトム化した群衆であると捉えている。彼によれば、それは政治や選挙に興味も理解も乏しい人びとである。それゆえに、代議制民主主義を多数者の暴政と批判し、少数者の尊重を訴えるステップに賛同する。煽動する側は明確な構想を示すとデモ参加者に亀裂が生まれかねないので、そうした構想の提示を意図的に避けている。参加者側は、感情的な思い込みに基づいて、欲求不満のはけ口を求めているので、攻撃の標的は変化しうる。Nithi Iosiwong, “Muan mahaprachachon”, *Matichon* (online edition), Dec 17, 2013 (http://www.matichon.co.th/news_detail.php?newsid=1387190430&grpId=03&catid=02&subcatid=0207) ; Nithi Iosiwong, “Luaktang khu withi thi fair thi sut”, *Khao Sot* (online edition), Dec 18, 2013 (http://www.khaosod.co.th/view_news.php?newsid=TUROd2Iyd3dNakU0TVRJMU5nPT0=§ionid=TURNd05BPT0=&day=TWpBeE15MHhNaTB4T0E9PQ==).
- (33) たとえば、2006年9月クーデタの2ヶ月前に、首都駐屯の大隊の司令官の人事異動が先例に反して師団長に相談することなく実施されたとき、ソムバットは当時の首相タクシンによる軍事クーデタを阻止するための異動であるという解説を行い、多くの国民をそう信じ込ませた。選挙で勝てる首相がクーデタに訴える可能性はほぼ皆無であることを承知した上での政治的な発言である。そのときに異動した大隊長がクーデタの実行部隊になった。拙稿「クーデタとその後：タイ陸軍の人事異動と政治介入」『国際情勢紀要』第80号（2010年2月）、163-165頁。
- (34) “Sombat Thamrongthanyawong adit athikanbodi nida rabu lak prachathipatai 1 khon 1 siang yang chai kap thai mai dai”, *Khao Sot* (online edition), Dec 11, 2013 (http://www.khaosod.co.th/view_newsonline.php?newsid=TVRNNE5qYzJOamN5TUE9PQ==&subcatid=)。なおソムバットは、民主党のアピシット政権が2011年に2007年憲法を改正して選挙制度を改革するのを助けたとき、2007年総選挙で民主党が比例代表制では惜敗していたことを背景として、下院議員をすべて比例代表制に変更することを提案していた。ただし、2011年7月の総選挙では民主党は比例区でも惨敗を喫した。
- (35) “2 siang sombat seri kap 1 siang khong khon thai”, *Khao Sot* (online edition), Dec 20, 2013 (http://www.khaosod.co.th/view_newsonline.php?newsid=TVRNNE56UTJOemswTnc9PQ==).
- (36) “Sombat thamrongthanyawong peot model patiwat patirup kanmuang phaenlom thaksin rang saphaprachachon”, *Prachachat Thurakit* (online edition), Dec 15, 2013 (http://www.prachachat.net/news_detail.php?newsid=1387077062). なお、1500万票というのは、2011年総選挙でプアタイ党が比例代表制（全国区）で獲得した1574万票を指している。
- (37) “Singha heiress on a mission”, *The Star* (online edition), Dec 17, 2013 (<http://www>.

thestar.com.my/News/Regional/2013/12/17/Singha-heiress-on-a-mission-Socialite-leads-peoples-revolution-campaign-to-freeze-democracy.aspx).

- (38) “Big sing yam cutyun mai min to.co.wo. pratat sam ik thi prachum pho.no.ngo. khon thua prathet luan mi phrakhun tan lan luak khang”, *Khao Sot* (online edition), Dec 21, 2013 (http://www.khaosod.co.th/view_newsonline.php?newsid=TVRNNE56VTVNRE0wTIE9PQ==§ionid=).彼女自身は忠告を受けた後も信念を曲げないとフェイスブックに書き込んだものの、12月19日未明に彼女の自宅には火焰瓶が投げ込まれる事件が起きた。彼女は一族への難を避けるために12月26日に母方の姓に改姓した。
- (39) “Pakkham pa suadaeng clip rapcang 200 hetnao ram bat phlae samrap phu chunchop rabop thaksin”, *Prachathai*, Dec 15, 2013 (<http://prachatai.com/journal/2013/12/50460>).
- (40) Voranai Vanijaka, “Them Ol'middle class Bangkokian blues”, *Bangkok Post* (online edition), Dec 15, 2013 (<http://www.bangkokpost.com/opinion/opinion/384873/them-ol-middle-class-bangkokian-blues>).
- (41) Apichat, Yukti and Niti, op. cit.; “Nithi wikhro chonchan nam thaksin khonchanklang radap lang sanoe sua daeng cat ongon eng”, *Prachathai*, Feb 21, 2013 (<http://www.prachatai.com/journal/2013/02/45434>).